

第4節 淡路島内の古墳について

淡路島内に所在する古墳はすでに破壊されたものも含め、その数は130基以上⁽¹¹⁾にのぼる。それらのうち前・中期古墳あるいは前・中期と推定される古墳は3基程度で、その大半が後期古墳であり、横穴式石室や竪穴式小石室（小竪穴）を内部主体とするものである。

今回報告した古墳でも、大木谷古墳は横穴式石室をもつ後期古墳、築鼻山1号墳は竪穴式小石室であるが、後期古墳である。両者とも海を見下ろせる位置にほぼ同時期に築かれている。しかし、大木谷古墳と築鼻山1号墳では、内部主体の内容の違いのほかに、大木谷古墳が単独墳、築鼻山古墳は数基が群集して築かれていたようである点も異なっている。

以下、淡路島の古墳を概観し、これらの点について述べることにする。

淡路島内の後期古墳の内部主体は、先述のように、横穴式石室と竪穴式小石室があり、ほかに箱式石棺も存在するが、数は少ない。まず、横穴式石室をみると、西淡町ハバ古墳⁽¹²⁾や洲本市明田丸山古墳⁽¹³⁾、洲本市曲田山古墳⁽¹⁴⁾、南淡町西山北古墳、南淡町野田山古墳などが淡路島内での大型横穴式石室で、ハバ古墳ではその幅が2.56mを測り、明田丸山古墳では石室幅2mである。西山北古墳では1.89mで、曲田山古墳、野田山古墳では1.7mである。一方、幅が狭いものでは洲本市平安浦岡古墳が最も幅が小さく、0.92mである。その他の横穴式石室では、洲本市厚浜台2号墳が石室幅1.6m、厚浜台1号墳は1.15m、洲本市亀谷古墳は1.3m、西淡町しだまる1・2号墳はともに幅1.5m、西淡町沖ノ島2・1号墳はそれぞれ1.3、1.27mで、五色町筑穴古墳⁽¹⁵⁾は約1.5m、淡路町石の寝屋1号墳⁽¹⁷⁾は1.3m、一宮町大木谷古墳は推定1.3m、南淡町西山南古墳は1.09mである。淡路島内での横穴式石室の規模は、平安浦岡古墳以外はすべて石室幅1m以上である。なお、五色町愛宕山1号墳も玄室幅1.77mのようであり、津名町奥穴見古墳は玄室が斜めに削られているが、石室側壁間の距離は約1.5m⁽¹⁸⁾である。

一方、竪穴式小石室では最も規模が大きいものでは南淡町丸田2号墳が幅1.25mと1mを越えるものであるが、丸田古墳群は2基存在し、いずれも横穴式石室の可能性⁽²¹⁾がある。横穴式石室であれば、1号墳の石室幅が0.9mであり、横穴式石室では最も幅が狭いものとなる。これらについては石室形態が明確になってから判断を行いたい。

竪穴式小石室のうち、幅では第2位の西淡町沖ノ島9号墳では0.95mであり、丸田2号墳以外はすべて1m未満となっている。それらは、沖ノ島5・17・10・4・7・8・3・12・14・11・13・16号墳ではそれぞれ、0.91・0.9・0.82・0.8・0.8・0.7・0.65・0.55・0.47・0.42・0.4・0.3mの石室幅である。西淡町鎧崎5号墳は幅0.9m、西淡町しだまる4号墳は0.7m。南淡町小山古墳は0.6m。三原町佐礼尾古墳は0.7m、三原町入田山1号墳は0.6m、三原町上八木古墳は0.45m、三原町佐礼尾1・2号墳はともに0.4m。洲本市厚浜台8号墳は0.5m、緑町長田山1号墳は0.35m、一宮町明神1号墳⁽²²⁾は0.58m、北淡町築鼻山1号墳第3主体は0.7mの石室幅である。淡路島内の竪穴式小石室の石室幅はほぼ1m未満であり、横穴式石室の1m以上とは明確に分離される。

なお、箱式石棺は竪穴式小石室との構造上の差が明瞭に認められるものではないが、箱式石棺と呼ばれているものには洲本市旧城内遺跡や三原町里見山古墳、一宮町明神2号墳がある。旧城内遺跡例は石棺幅0.38m、長さ1.6m、里見山例は幅0.5m、長さ1.8m、明神2号墳例は幅0.49m、長さ0.87mである。すべて幅0.5m以下である。

以上、両型式の石室規模、特に石室幅について見てきたが、横穴式石室が幅1m以上に対し、竪穴式

小石室が1 m未満となっている。横穴式石室の方が規模が大きいことと、1 mを境として両者が分かれることについて注意しておきたい。

次に、横穴式石室墳で単独墳あるいは単独墳的に存在するものには、一宮町小丸古墳・一宮町枯木古墳・一宮町大木谷古墳・一宮町山門古墳・一宮町郡家（荒神山）古墳・津名町奥穴見古墳・五色町岡の谷古墳・五色町筑穴古墳・洲本市平安浦岡古墳・洲本市曲田山古墳・洲本市亀谷古墳・洲本市明田丸山古墳・西淡町山の口古墳・西淡町ハバ古墳・南淡町西山北古墳・南淡町西山南古墳・南淡町八幡古墳・南淡町野田山古墳があり、横穴式石室墳のみで古墳群をなすものは確実な例を知らない。

一方、竪穴式小石室墳で単独墳あるいは単独墳的に存在するものには、北淡町林古墳・一宮町宇栄我山古墳・三原町上八木古墳・南淡町荒神森古墳・南淡町秋葉神社古墳・南淡町前山古墳・南淡町小山古墳・南淡町黒岩古墳があり、淡路島南西部に多く存在している。また、竪穴式小石室墳のみで群を構成するものには、一宮町明神古墳群（2基）・緑町長田山群集墳（2基）・三原町入田山群集墳（3基）・三原町佐礼尾古墳群（3基）がある。

また、横穴式石室墳と竪穴式小石室墳で古墳群を形成するものでは、五色町愛宕山古墳群・洲本市厚浜台群集墳・西淡町しだまる古墳群・西淡町鎧崎古墳群・西淡町沖ノ島古墳群があり、鎧崎古墳群や沖ノ島古墳群では大半が竪穴式小石室となっている。²⁴⁾

横穴式石室墳では単独に存在するものが淡路全域に多く認められることと、竪穴式小石室墳で単独に存在するものが地域的に限られること、横穴式石室墳と竪穴式小石室墳で古墳群を形成するものが存在し、そのなかで大半が竪穴式小石室のものが認められることから、横穴式石室墳と竪穴式小石室墳の被葬者の間には階層差の存在が考えられ、先にみた規模の点でも首肯できるものであろう。

次に横穴式石室、竪穴式小石室の時期について見ることにする。²⁵⁾

前期古墳と考えられるコヤダニ古墳は竪穴式石室と推定されており、佐礼尾古墳は後期前半に遡る可能性がある。後期後半の竪穴式小石室では、築鼻山1号墳が6世紀後半～末、明神1号墳は6世紀第3四半世紀、沖ノ島古墳群の竪穴式小石室は6世紀中頃～7世紀前半である。一方、横穴式石室では、大木谷古墳と郡家（荒神山）古墳が6世紀第3四半世紀、愛宕山古墳群は6世紀末～7世紀初頭、ハバ古墳は6世紀末とされている。沖ノ島古墳群1・2号墳では6世紀末・7世紀前半である。また、奥穴見古墳は6世紀末頃、厚浜台1号墳は6世紀第3四半世紀のようである。²⁶⁾横穴式石室は淡路島内では6世紀第3四半世紀のものが現在のところ最も古いようである。一方、竪穴式小石室は佐礼尾古墳を除いても、6世紀中頃には存在しており、横穴式石室よりも古くから存在している。また、両者が混在する古墳群が存在していることから、竪穴式小石室被葬者層に新たに6世紀第3四半世紀頃に横穴式石室被葬者層が現れたと推定できると思われる。

それら被葬者の権力基盤となったものは、三原平野や洲本地域のように豊かな農地を有する地域においては主として農業であったと推定されるが、そのような農地に乏しい地域においては、農業のみでは権力基盤とはなり得なかったと思われる。それ以外に権力基盤となり得ると推定できる遺物が淡路島西側海岸地域や南西海岸地域の各古墳から出土している。

西側海岸地域では、愛宕山古墳群から製塩土器が出土している。また、明神1号墳からも製塩土器と推定できる粗製の土師器碗が出土している。一方、淡路島南西海岸地域の古墳のうち、沖ノ島古墳群からは浮子・土錘・釣針のほか、棒状石製品が出土している。この棒状石製品は、同地域の鎧崎古墳群やしだまる古墳群などからも出土しており、製塩に関する道具あるいはアワビおこしなどと考えられて²⁷⁾

いる。後者の用途とすれば、他の遺物と併せ考えて、漁業色が強く認められる⁽³⁰⁾。

古墳は権力を誇示するためのモニュメントであり、築鼻山古墳群・大木谷古墳・明神古墳群など西側海岸地域の古墳は海上からよくみえる位置に存在している場合が多い。このことから、淡路島西側海岸地域のこれらの古墳被葬者は、製塩のみならず漁業も行っていたと推定される。一方、淡路島南海岸地域でも海を見下ろす台地上や小島に古墳を築造しており、かつ、現在も港となっている場所に近接していることから、漁業および海上交通、狭い範囲であろうが、制海権を握っていたことも推測される。この点については、西側海岸についても同様のことが推定できるものと思われる。(岸本)

註

- (1) 石器の材質については、植松 剛氏（兵庫県地学会顧問）よりご教示いただいた。
- (2) 荻野繁春「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁』Vol.14 1994-86年
- (3) 尾上 実「南河内の瓦器椀」『藤沢一夫先生古稀記念 古文化論叢』1983年
- (4) 森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ』大和中古近研究会 1992年
- (5) 濱岡さみ子氏よりご教示いただいた。
- (6) 浦上雅史「淡路島の古窯址出土の須恵器について」『淡路考古学研究会誌』第3号 淡路考古学研究会 1980年
- (7) 波毛康宏・浦上雅史「第2章 淡路国」『兵庫県の考古学』村川行弘編 吉川弘文館 1996年
- (8) 森 隆「近江出土の瓦器椀に関する若干の検討」『大和の中世土器Ⅱ』前出。
- (9) 吉識雅仁・岸本一宏『鉦田遺跡－淡路縦貫道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』兵庫県文化財調査報告書 第78冊 兵庫県教育委員会 1990年
- (10) 吉識雅仁・岸本一宏ほか『森遺跡－淡路縦貫道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』兵庫県文化財調査報告書 第55冊 兵庫県教育委員会 1988年
- (11) 浦上雅史『淡路島の古墳時代』洲本市立淡路文化史料館 1993年
以下、各古墳のデータで特に註を設けない場合、本註文献による。
- (12) 波毛康宏「ハバ古墳発掘調査報告」『竹べら』第6号 淡路考古学研究会 1986年
- (13) 「明田丸山古墳実測調査報告」『淡路考古学研究会誌』第3号 前出。
- (14) 浦上雅史・金田靖史・岡野慶隆「曲田山古墳石室実測調査報告」『淡路考古学研究会誌』第2号 淡路考古学研究会 1974年
- (15) 岡山真美『淡路・沖ノ島－淡路・沖ノ島古墳群発掘調査報告』西淡町教育委員会 1987年
- (16) 『五色町史』五色町史編纂委員会 1986年
- (17) 森 和重「淡路島北端の古墳2基」『淡路考古学研究会誌』第3号 前出。
- (18) 岡本 稔「ハバ古墳について」『竹べら』第6号 前出。
- (19) 津名郡町村会 伊藤宏幸氏のご教示による。
- (20) 広岡俊二「奥穴見古墳について」『淡路考古学ニュース』第9号 1974年
- (21) 三原郡広域事務組合 坂口弘貢氏のご教示による。
- (22) 阿久津 久編『明神古墳群』一宮町教育委員会 1972年
- (23) 櫃本誠一・松下 勝『日本の古代遺跡 3 兵庫南部』保育社 1984年
- (24) 鎧崎古墳群では11基中10基、沖ノ島古墳群では15基中13基が竪穴式小石室である。
- (25) 須恵器による各古墳の時期については、田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年による。
- (26) 小川良太「資料4 郡家古墳」『明神古墳群』前出。
- (27) 波毛康宏・永田誠吾『淡路の古墳 副葬品は語る』1991年 中の写真。
- (28) 岡本 稔「古事記・日本書紀と淡路の考古学」『竹べら』第1号 淡路考古学研究会 1983年
- (29) 森 浩一「弥生・古墳時代の漁労・製塩具副葬の意味」『日本の古代 8 海人の伝統』大林太良編 中央公論社 1987年。また、貝類の採集用の漁具と考える説もある。櫃本誠一「淡路の海人」『万葉集の考古学』森 浩一編 筑摩書房 1984年。
- (30) 岡本 稔「淡路島の歴史的環境（縄文時代～古墳時代）」『明神古墳群』前出ほか、岡本氏の指摘。